

沖島南におけるセタシジミ放流稚貝の初期生残と分散

井戸本純一

1. 目的

沖島南漁場におけるセタシジミ種苗の放流直後の生残や分散の実態を把握するため、0.3mm 稚貝を十字状に放流した水域（水深約10m）で稚貝の採集調査を試みた。

2. 方法

2022年6月9日および20日に合計1455万個の0.3mm 稚貝を過年度と同じ200m×200mの十字放流ライン上に精確に放流した。放流時にはGPS 漂流板による湖流観測を並行した。調査には砂礫底用に改良した採泥器（15cm×15cm）を用い、7月25日に十字の中心付近2地点と放流ラインとは45度ずれた方向の中ほど4地点で各1回底質を採取した。底質は54GG メッシュ（315μm）上で洗浄して持ち帰り、実体顕微鏡を用いて貝類を選別した。

3. 結果

放流ラインに対する調査地点の位置と放流時の漂流板の軌跡を図1に示した。流速はいずれも毎秒約4cmであり、稚貝が着底するまでの移動は無視できる範囲と考えられた。

シジミ類の採集結果を右表にまとめた。採集された全10個体中半数が殻長2mm未満であったが、殻長1mm以下の個体はシジミ類では確認されなかった（図2）。当該水域の自然産卵は7月以降と考えられ、放流稚貝は5月の早期採卵に由来することから、採集された稚貝はすべて放流個体である可能性が高い。地点No.3～6をそれぞれ1haの区画の中心とみなすと、そのうち3つで1個体/0.0225m²以上の稚貝が採集されたことになり、放流後1か月あまりの生残率は9%以上と試算される。

放流密度が最も高いはずの中心付近よりも放流ラインから数十メートル離れた地点No.3で多くの稚貝が採集されており、放流後の稚

貝が速やかにかつ広範囲に分散、移動していることがうかがわれた。

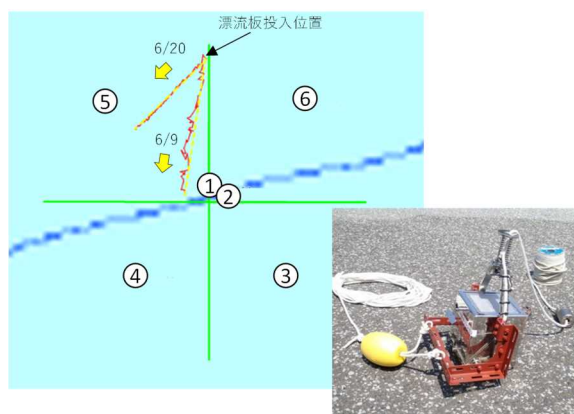


図1 稚貝放流水域における調査地点と放流時の漂流板の軌跡（写真は調査に用いた可倒式エクマンバージ採泥器）

表 各調査地点で採集されたシジミ類全個体の殻長（mm）

地点No.	殻長2mm以上		殻長2mm未満	
1	8.67	2.67		
2	9.69		1.14	
3	11.37	2.40	1.80	1.25
4			1.67	
5				
6			1.32	

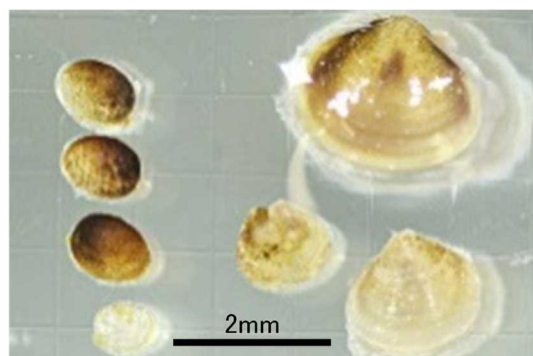


図2 地点No.3で採集されたシジミ類のうち小型の3個体（左の4個体はマメシジミ類）